巻頭言

知的彷徨

皆藤　章

10数年前、研究者として門前の小僧であった筆者がそれなりに大学事情を理解したころ、「紀要とは何だろう」と考え込んだことがあった。素朴なことに疑問を抱くのを信条とする筆者ならではと言えばそれまでであるが、当時は真剣であった。そして、他の専門領域ではあるが同じく血気盛んな若手研究者と大いに議論することとなった。ふたりの結論は一致していた。「大学から紀要をなくしてしまわないかぎり学問の発展はない」。若い時代のことであった。

10数年経った現在、紀要廃絶論者の筆者が紀要の編集に携わるとは何か因縁めいたものを感じる。まったく不思議なものである。それでは、「今の自分は紀要の存在意義をどのように考えているのか」。編集の任にあたって真っ先に考えたことである。

現在の筆者は、専門性に細分化された学術雑誌では扱うことのできない幅広い学問領域に自由に入り込んでいける特徴が紀要にはあると考えている。およそ学問の発展には独創性が必要不可欠であるが、その基盤になる知的彷徨こそが紀要の存在意義ではないだろうか。とくに、本紀要はそうあるべきだと考えている。「大学から紀要がなくなってしまうと学問の発展はない」。このように述べるところをみると、現在もまだ血気が残っているようである。

臨床教育学は若い学問である。狭い観点に縛られることなく、さまざまな学問領域からおおいに刺激を受けて、その刺激を風として帆を膨らませクリエイティヴな航海をつづけていきたいものである。本紀要は、そのための帆船と言えよう。

今回で第2号となる本紀要は、まだとうてい成熟の域ではない。けれども、それだけに、硬直化することなく柔軟な研究視角をもって知的彷徨している姿がなければならない。筆者は、完成された論文などありえないしおもしろくないと思っている。ただし、この意味では、学問の発展可能性への嗅覚が必要不可欠なのであって、それがなければ、いかに彷徨していたとしても何の意味もないであろう。

20世紀最後の紀要である本号によって、新たな世紀に向けて大きく帆を膨らませ進もうとしている臨床教育学講座に追い風が吹くことを祈りたい。